

令和 6 年 4 月 25 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01575

研究課題名（和文）ワルラスにおけるリスク・不確実性・企業者 - 一般均衡理論の思想的解明

研究課題名（英文）Walras on Risk, Uncertainty and Entrepreneur: the General Equilibrium Theory from a Historical Perspective

研究代表者

御崎 加代子 (Misaki, Kayoko)

滋賀大学・経済学系・教授

研究者番号：90242362

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：ワルラスが構築した一般均衡理論は、現在もなお大きな影響を及ぼし続けている。しかしながらその理論は、発表当時から、時間の不在、企業者利潤ゼロの仮定など、多くの非現実的要素が批判され、それをより現実的な実証モデルに修正発展させることが、20世紀の理論経済学者たちの課題であった。本研究は、現代理論の見地からではなく、ワルラスの経済学形成過程とその歴史的背景に経済学史のアプローチで取り組み、ワルラスが現実経済におけるリスク、不確実性、企業者をどのように考察していたのかを明らかにし、その考察が、ワルラスの純粋経済学（一般均衡理論）とどのような関係にあるのか、その思想的、社会哲学的意義も含めて解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の意義は、これまであまり知られていなかったワルラスの思想を明らかにしたことにある。しかしそれだけにはとどまらず、現代の経済理論においても鍵概念となる「リスク、不確実性、企業者」に焦点を当て、ワルラス研究の分野横断的な研究の出発点となるものである。経済学史研究者たちによるワルラス研究と、理論経済学者たちのワルラス研究はこれまで大きく分断されてきた。前者の研究はこれまであまりにも専門的、個別的であり、ワルラスのもともとの理論とはかけ離れたワルラシアン・エコノミクスを論じる理論経済学者とは全く対話の糸口が見いだせていなかったからである。

研究成果の概要（英文）：The general equilibrium theory constructed by Walras continues to exert significant influence to this day. However, from the time of its publication, the theory was criticized for many unrealistic elements, such as the absence of time and the assumption of zero profit entrepreneur, and the challenge for theoretical economists in the 20th century was to develop it into a more realistic positive model. This study focused on the formation process of Walras's economics and its historical background, not from the perspective of contemporary theory, but from that of history of economic thought to clarify how Walras considered risk, uncertainty, and entrepreneurs in the real economy, and how this consideration relates to Walras's pure economics (general equilibrium theory). I also clarified the relationship between this consideration and Walras's pure economics (general equilibrium theory), including its ideological and socio-philosophical significance.

研究分野：経済学史

キーワード：ワルラス 一般均衡 企業者 利潤 リスク 不確実性アントレプレナーシップ

1. 研究開始当初の背景

レオン・ワルラス(1834-1910)が構築した一般均衡理論は、現代の経済学の出発点として現在もなお大きな影響を及ぼし続けている。しかしながらその理論は、発表当時から、時間の不在、企業者利潤ゼロの仮定など、多くの非現実的要素が批判され、それをより現実的な実証モデルに修正発展させることが、20世紀の理論経済学者たちの課題であった。現代理論の見地からすると、ワルラス・モデルはリスクや不確実性を分析できない未熟な理論である。しかしワルラスの経済学形成過程とその歴史的背景に注目すると、ワルラスが理論的未熟さゆえに、これらの概念を捨象したとは考えられない。本研究は、ワルラスが現実経済におけるリスク、不確実性、企業者をどのように考察していたのか、またその考察は、ワルラスの純粋経済学(一般均衡理論)とどのような関係にあるのか、その思想的、社会哲学的意義も含めて解明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ワルラスがリスク、不確実性、企業者といった概念を実際にはどのようにとらえていたのか、またその考察は、一般均衡理論(純粋経済学)とどのような関係にあるのかを、その歴史的背景、社会哲学的意味も含めて解明することである。ワルラスの経済学はそもそも、純粋経済学だけでなく、応用経済学と社会経済学を含む三つの分野から構成される。一般均衡理論が含まれる純粋経済学を、ワルラス自身は、現実経済を直接対象とする実証理論とは考えていなかった。ワルラスにとって、現実経済を対象とするのは、所有制度と税制度の改革を通じて正義の実現を目指す社会経済学、国家の介入により自由競争の組織化を実現し効率性を追求する応用経済学の二つの分野であり、純粋経済学はそれぞれの基礎理論の位置づけである。残念ながら、社会経済学と応用経済学の二つをワルラスは完成させることができなかった。そのため純粋経済学(一般均衡理論)がワルラス経済学のすべてと誤解され、その実証理論としての妥当性が20世紀の経済学者たちから集中的に研究されることになった。

1987年から2005年にかけて、『ワルラス父子経済学著作集』(全14巻)がフランスで出版されて以降、ワルラス純粋経済学の方法論と、社会経済学・応用経済学との関係についての研究は、大きく前進した。しかしながら経済学史研究者たちによるワルラス研究と、理論経済学者たちのワルラス研究とは、分断されたままであった。前者の研究があまりにも専門的、個別的であり、ワルラスのもともとの理論とはかけ離れたワルラシアン・エコノミクスを論じる理論経済学者とは全く対話の糸口が見いだせなかったのである。本研究は、学史研究としてこれまで明らかにされてこなかったワルラスの思想に注目するだけでなく、ワルラスの思想においても、現代の経済理論においても鍵概念となる「リスク、不確実性、企業者」に焦点を当て、経済学史研究者と理論経済学者の対話と協力が実現できる準備を意図した。

3. 研究の方法

本研究ではまず、ワルラス「企業者」概念の形成過程に注目し、フランス経済学史の中でその位置づけを行った。フランスには、イギリスに先んじて、カンティロンやJ.B.セーなどに

よる、企業者とリスク・不確実性についての進んだ考察がなされていた。ワルラス・モデルにおける企業者利潤ゼロの仮定は、一見、後退したように見えるが、フランスの経済学者たちがワルラスに与えた影響を再考察する。その研究結果を踏まえて、ワルラスの「リスク」「不確実性」をめぐる考察を主にワルラスの純粋経済学以外の文献に注目して検討した。具体的にはワルラスが青年時代にとりくんだ協同組合運動に関する著作、ローザンヌ大学赴任後の応用経済学にかかわる著作と講義ノートの検討を行い、ワルラスの経済学形成過程におけるこれらの概念の位置づけとその意義を明らかにした。

4．研究成果

本研究課題の研究成果は、Kayoko Misaki 著, *Léon Walras's Economic Thought: The General Equilibrium Theory in Historical Perspective* (レオン・ワルラスの経済思想: 歴史的視点からの一般均衡理論) というタイトルの単行本として、2023年12月に Routledge から刊行された。またフランス経済学史におけるワルラス企業者概念の位置づけ、シュンペーターやカーズナーとの比較については、」の他の企業者概念との比較については、(招待論文) 御崎加代子著「ワルラスからシュンペーターへ—アントレプレナーシップの歴史的・思想的背景—」『組織科学』第56巻2号(2022年12月) pp.4-14 として発表した。後者のテーマについては、2024年度から新たな基盤研究(C)の研究課題として採択され、今後取り組む予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 御崎 加代子	4. 巻 56-2
2. 論文標題 ワルラスからシュンペーターへ アントレプレナーシップの歴史的・思想的背景	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 組織科学	6. 最初と最後の頁 4-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11207/soshikikagaku.20230217-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kayoko Misaki
2. 発表標題 Walras on Sympathy
3. 学会等名 The Charles Gide Society（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 御崎 加代子
2. 発表標題 シュンペーターとイノベーション：その歴史的・思想的背景
3. 学会等名 日本ベンチャー学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Kayoko Misaki	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 142
3. 書名 Leon Walras's Economic Thought: The General Equilibrium Theory in Historical Perspective	

〔産業財産権〕

〔その他〕

御崎 加代子 Kayoko MISAKI homepage
<https://kayokomisaki.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------